



Title	近代日本における新民謡の成立：音楽・詩・活動のあり方からの考察
Author(s)	齋藤，桂
Citation	大阪大学，2010，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57867
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【37】

氏 名	さいとう しょうけい 藤 桂
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 4 9 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	近代日本における新民謡の成立－音楽・詩・活動のあり方からの考察
論 文 審 査 委 員	(主査) 准教授 伊東 信宏 (副査) 教 授 根岸 一美 教 授 富山 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は近代の日本において、「新民謡」と呼ばれた音楽および文学のジャンルが、どのように成立し、どのような要因によって可能となったのかを、文化史的音楽史的に考察するものである。序、および第 1～5 章から成り、各章は時代順に各々のトピックを扱っている（A 4 判 1 3 4 頁）。

序ではまず、対象となる「新民謡」が定義され、この新民謡の歴史が概観され、本論文の目的が確定される。

第一章「黎明期の新民謡：『俚謡』と『民謡』をめぐって」は、文学としてはじまった新民謡について、その始祖といえる詩人、野口雨情の活動を中心に、「新民謡」の同時期の類似した文化現象である「俚謡」との比較において、新民謡の特質を捉えようとするものである。

第二章「音楽としての新民謡の誕生：中山晋平《須坂小唄》について」は、音楽としての新民謡の始まりを扱うもので、前章で扱った野口雨情の詩に作曲する形で成立した音楽としての新民謡が、どのような意図をもって作られ、またその意図が作品にどのように現れているかを、作曲家、中山晋平の作曲論を通して考察している。

第三章「詩と音楽と歌の争い：北原白秋と民衆詩派の新民謡観」では、新民謡が広まりつつあった時期に起こった或る論争が取り上げられる。それは、北原白秋と民衆詩派と呼ばれた詩人達との間の論争だったのだが、これは本来、定型詩と自由詩の問題を扱ったものだった。しかし、両者が詩の理想として掲げたのが「民謡」であり、その意味では新民謡をめぐる論争であった、と申請者は捉えている。

第四章「新民謡参考書の世界」では、流行の結果、アマチュアにまで広まった新民謡の創作について、彼らを対象に書かれた新民謡創作のための参考書を取り上げる。これらの参考書では、観念的に書かれることの多かったプロの作者のエッセイのようなものとは異なり、極めて具体的に創作法が語られ、そこから新民謡の特徴も見通すことができる。とりわけ、大関五郎『民謡辞典』（昭和 4 年）のユニークなあり方は、当時の新民謡の前提を浮かび上がらせて興味深い。

第五章「昭和初期の岐阜県における新民謡」は、上記のアマチュアによる創作実態の例として、岐阜県における新民謡の同人誌活動を扱うものである。地方においては、単に新民謡を作って楽しむだけでなく、音楽会や舞踊との共同企画など、文化的活動の母体として、新民謡同人誌が機能していたことが明らかにされる。

最後におかれた「おわりに」では、第二次大戦へと傾斜してゆく時期以後の新民謡の「その後」が概観され、さらにこれまでの議論を振り返って、このような文化現象を扱う際には、その「創られた伝統」としての擬制を暴いてよしとするのではなく、それが実際に構成されてゆく過程を丁寧に跡づけ、その内実を把握することこそが、我々自身の問題としてそれを引き受けることにつながる、という方向が示される。

なお、巻末には資料として、申請者が整理した新民謡関連の一次資料の一覧が付されている。これは申請者が確認できた当時の新民謡関連の書籍、雑誌の目録で、地域別に整理されており、25 ページに及ぶリストとなっている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

近年まで、「新民謡」は音楽文化史の中でも些末な問題として、ほとんど顧みられなかったが、日本独自の大衆文化、民俗音楽の様々な論点を浮かび上がらせる題材として、何人かの論者の注目するところとなってきている。その意味では、国文学資料館などにおける丹念な一次資料の収集発掘をふまえてまとめられた本論文は、この問題に関するモノグラフとして、先駆的な意味を持つ研究と言える。本論文に関する口頭試問は、2010 年 2 月 9 日（火）、およそ 1 時間 30 分におわたって実施した。ここでは、本論文が打ち出した新民謡に対する様々な斬新な切り取り方（普遍化／特殊化、ambiguity／vague といった概念装置）が高く評価された一方で、本論文が扱わなかった戦時期における様々なテキストの「朗読」の問題と新民謡との関連こそ重要だったのではないか、あるいは、新民謡が様々な矛盾を抱え込みながらそれでも確かに存在し、そのような曖昧

な存在として、どのような集団性を形成していたのかということを考えて欲しい、といった指摘や要望も示された。また、文学と音楽の双方にまたがる現象であったにしても、音楽としての新民謡の分析に今一步の踏み込みが欲しかった、という声もあった。これらに対して申請者は的確に回答し、上記のような批判点の多くは先駆的研究であるが故の限定であることを説得的に示したと同時に、今後の研究の展開をも期待させた。また、何より申請者が第四章において掘り起こしてきた新民謡のユニークな参考書、あるいは第五章における岐阜県についての詳細かつ網羅的な資料などは、価値のある達成であり、本論文は今後のこの分野の研究にとって大きな意味を持つものとなると考えられる。以上の成果により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。